

Assault
Prevention
Information
Space

～暴力防止に役立つ情
報の収集や発信の拠点
として様々な活動を行
っています～

APIS

NPO法人暴力防止情報スペース・APIS (アピス)

2018.4.10

No.71



(撮影 野中ひとみ)

Index

巻頭言	「転居しました」 (鈴木登紀子)
CAP 報告	関西CAP連絡協議会交流会 (山田悦子)
APIS 報告	プチ講座「セルフ・ディフェンス」 (山田悦子)
APIS 報告	「体罰をみんなで考えるネットワーク 冬のつどい」参加 (山田悦子)
APIS 報告	「2017年度おおさか相談フォーラムの感想」 (佐々木興子)
APIS 報告	「アディクション・ライブラリー」スタッフ参加 (野中ひとみ)
APIS 報告	「都島区ボランティア・市民活動センター勉強会」 (横山恵子)
本の紹介	本の紹介「ききがたり～ときをためる暮らし」(M. Y)
活動記録	2018年1月～3月

体罰をみんなで考えるネットワーク 冬のつどい に参加

2018年2月4日
龍谷大学大阪梅田キャンパス

テーマは、たたかないしつけを広めるために、というもので神戸学院大学の神原文子先生の講義を聴いた。

最近では、体罰を受けたりDVを目撃したりすると脳の一部分が萎縮するなどの科学的な根拠も出ているので、体罰がいかにか子どもたちにとって有害であるかは説得力のある説明が出来そうである。

けれども、日本での体罰の実態は、しつけをする際に他に手段がなければ体罰をすべきであるという考え方の人が43パーセント（セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン調査）もいる。子どもへのしつけが、いかに難しいものであるかを表しているともいえるし、大人にとっても忍耐力の必要な行為であるともいえるだろう。

私が興味をひかれたのは、体罰容認意識がどのようなことから形成されるのかを、高校生の調査から考えるという部分である。

暴力を受けた経験があるほど、体罰容認意識が高い結果は、自分がきちんとした大人になれたのは、厳しくしつけてもらったからだという考え方に至るからではないかと思う。人は、自分の経験を良しとしてそこを基準に考えていく傾向があると私は思う。もし体罰を使わない方法でしつけをしてもらっても同じくきちんとした大人になれたのではないか？という考えには至らないのかもしれない。

確かに、子どもたちに指導する際に、なかなかこちらの意図する結果が得られないとイライラするし、速攻性のある指導方法に頼りたくなる気持ちが出る。大きな声で怒鳴る、脅す、従わないなら叩くといった暴力行為の元には、人間はその時は静かに指導下にいるように振る舞う。長い目で見れば、そのような支配下にいなければ、自分の行動をコントロールしなくなるということかもしれない。

私達大人は、だからこそ、暴力以外の指導方法を常に工夫し、すぐに良い結果が出なくても、忍耐強くなる必要がある。大人は、大変。だが、大人だからこそ、子どもたちに脱体罰の姿勢を見せなければと思う。

(後藤真幸)

